

県有文化施設のデジタル化推進

～ウィズ・コロナ時代に対応する施設運営～

現代社会において、デジタル化はもはや抗うことのできない時代の要請。

それは文化施設においても同様だ。長引くコロナ禍も、それを後押ししている。

本県は、富国有徳の源泉でもある博物館や美術館を未来へつなぐため、デジタル技術を積極的に導入している。

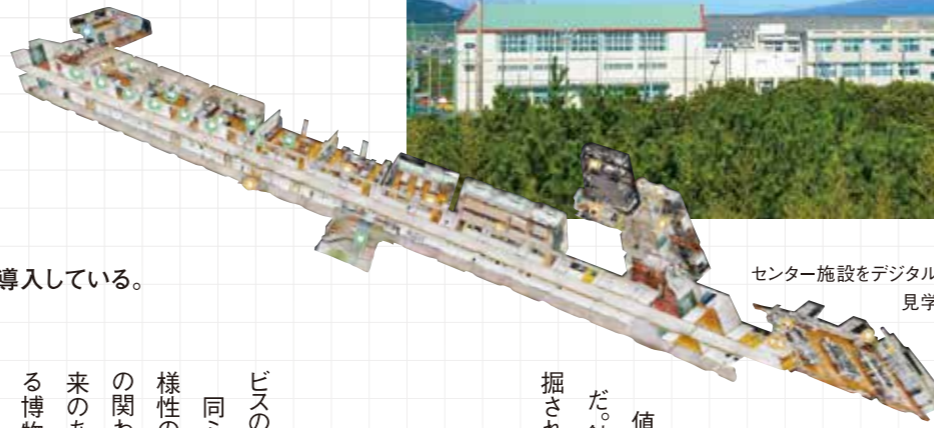


埋蔵文化財の発掘調査をメインに、出土品の管理や活用にも積極的に取り組んでいる。施設内では、出土品の展示の他、整理作業の様子も見ることが出来る（平成28年10月、現在地である旧庵原高等学校跡地に移転）。

VR館QRコード



センター施設をデジタル空間で立体化させている状態。この画面で施設全体を立体的に俯瞰しながら、見学したい場所をクリックしてピンポイントで移動し、3D空間が探索できる。



安心安全な施設運営

文化財や美術作品、貴重な学術資料などの文化遺産は、県民のみならず全人類の共有財産だ。したがって、博物館や美術館などの文化施設は、それらを適切に管理・保存しながら、時間や地理的な制約を超えて鑑賞できる環境づくりも求められている。

一方、長引くコロナ禍により、文化施設の来館者は激減し、運営面での影響は深刻だ。そうした状況の打開策としても、文化施設をデジタル化し、誘客を促進することは有効だ。本県は、安心安全で持続可能な施設運営を目指し、県有文化施設のデジタル化を進めている。

県有展示施設初のVR映像

静岡県埋蔵文化財センター（愛称しずまい）は、県民の財産である埋蔵文化財を保護・活用することで郷土への誇りと愛情を育て、その価値を未来へ継承する文化施設だ。館内では県内各地の遺跡で発掘された旧石器～江戸時代の出土

ビスの二本柱で進む。

同ミュージアムは、静岡の豊かで多様性のある自然を通して、人と地球の関わりを歴史を通して、そこから未来のあり方を来館者とともに考える博物館だ。旧県立高校の校舎を再活用した斬新な空間デザインは、思考を促し仕掛けにあふれ、国内外から高い評価を得ている。

情報発信は、二つのウェブコンテンツで構成される。一つは常設展の目玉や普段未公開の標本資料などを紹介する動画の配信。もう一つは、ゲーマップのストリートビューを利用した館内外公開だ。「しずまい」は、全館内を公開しているが、同ミュージアムは、いわゆる「部分見せ」の形をとり、「実際に見てみたい」という気持ちをかき立てる仕掛けになっている。

来館者へのサービスでは、スマートフォンを使用した4か国語対応の音声ガイド、団体利用やキッズルームの使用をネットで事前に受け付ける予約システム、観覧料のキャッシュ



11月から事前予約システムで利用可能となるキッズルーム（24時間受付が可能）。



県指定文化財「西の谷銅鐃」。表面には精緻な文様が施され、当時の鍛造技術の高さがうかがわれる。

品が公開されている。最大の特長は一部に「ハンズ・オン展示」があること。本物の土器や石器に触って、古代人の暮らしを想像することは、知的好奇心をくすぐる楽しい体験だ。

同センターのデジタル化は、この8月に開設した「しずまいVR館」が大きな柱。これは、3Dスキャンが可能で特殊カメラで建物全体を撮影し、そのデータをVR映像として見学できるコンテンツだ。県有展示施設では初の導入例で、すべての展示品を高画質で観覧できる上に、普段はあまり見られない遺物の保存処理の現場も含め、館内をくまなく探索できる。VRゴーグルを使えば、その場に

いるような気分も味わえる。同センターの野村所長は「郷土の埋蔵文化財を気軽に楽しく疑似体験してもらって、多くの人が、特に若い人たちの関心と呼び込み、実際の来館へつなげたい」と語る。こうした3DVR映像による新たな展示手法は、コロナ対策の他、入院中の子どもや高



2F図鑑カフェから見える桜と駿河湾のストリートビューの様子。



スマホで楽しめるふじミュージアの無料音声ガイドを導入。常設展示の見どころや展示デザインに込められた意味を解説。

ふじのくに地球環境史ミュージアム

「百年後の静岡が豊かであるために」をテーマに、人と自然が共生する未来を考える博物館。今年3月に開館5周年を記念して新たな常設展示室「人類史ライブラリー」がオープン。



ウェブコンテンツ動画（11月からミュージアムのYoutubeで視聴可能）

年齢など、実際に来館できない人々へのサービスとしても期待されている。

施設の特徴に応じた戦略

今年、開館5周年を迎えた、ふじのくに地球環境史ミュージアムのデジタル化は、来館促進へ向けた情報発信と、実際の来館者に対するサー



縄文、弥生、古墳。各時代の本物の土器片を使っての分類体験。



発掘調査報告書に掲載する出土品を撮影するための専用スタジオ。

ツェレス決済などを導入。利用者の利便性を向上させると同時に、コロナ禍においては展示室内の三密や対人接触を回避できる。こうしたデジタル化は、富士山世界遺産センター、県立美術館、ふじのくに茶の都ミュージアムなどでも各施設の特徴に応じて、きめ細かい戦略が練られている。

本県の文化資源にまつわる取り組みは、文化施設のデジタル化と文化財のデータベース化（今号P9～P10）という両輪で進む。文化資源を富国有徳の源泉とするなら、文化施設はその価値をよりいっそう高めるゲートウェイであり、加速装置だ。これもまたコロナ禍で生まれた「ふじのくにスタイル」と言えるだろう。